断章 旭川のアイヌ語地名研究 ㉙

高橋 基

―石狩川右岸のメム(中)―

石狩川右岸にポロメムとポンメムが記載されている最古の地図は、本連載の第三回に紹介した文化十四年(一八一七年)に、間宮林蔵が作成したと言われる地図である。

第三回の掲載地図は、北海道大学附属図書館所蔵図で、今号掲載の地図は、国立公文書館所蔵図である(以下、間宮図と略称)。石狩川の左岸のチユクベツ(忠別川)と、同じく左岸のウシシベツ(牛朱別川)の間の石狩川右岸に、ご覧のようにムリチヤロ、ホロメム、ホンメムが記されている。いずれも、石狩川に注ぐ川筋が描かれているので、川名である。

同じような湧き水のある川が並んでいたので、大きい方をポロメム、小さい川をポンメムと呼称したのであろう。しかし、これが前回紹介した、明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図のポロメム、ポンメムと同一とはにわかに断定はできない。なお、北大所蔵図は、「ホロメス」「ホシメム」の表記なので、写図としては、本掲載図の方が信頼度が高い。

また、ムリチヤロは、川名であるが、コタンを示す●印があるので、そこにコタン(集落)があったのであろう。ムリについては、湧別川の支流で、丸瀬布(まるせっぷ)で合流する武利(むり)川のアイヌ語名が、掲載図でもムリである。武利川は諸説あるがイラクサ説が有力で、ムリチヤロはイラクサ川の川口とも解釈できるが、その後の資料には見ることがなく不詳。(武利川については、伊藤せいち『アイヌ語地名Ⅱ・紋別』を参照されたい)

さて、アイヌ語地名と共に掲載図の重要な点は、ムリチヤロの対岸に、番屋(ばんや)を示す■印があることである。番屋とは、松前藩主または知行主(ちぎょうぬし)が、アイヌの人たちとの獣皮・干鮭(からさけ)等の交易のために設置した建物。本連載第二回で述べたが、文化四年(一八〇七年)に、天塩川筋から比布のタナシ(現・棚瀬山)に山越えし、そこから石狩川を丸木舟で下った近藤重蔵は、比布川川口の番屋で一泊し、旭川の忠別川合流点下流左岸のチユクベツブトの番屋でも一泊している。間宮図では、近藤重蔵が宿泊した比布川川口の番屋は同一と思われるが、ムリチヤロ対岸の番屋は、近藤重蔵が宿泊したチユクベツブトの番屋とは、明らかに異なっている。

間宮林蔵の上川調査は、秋葉實氏の研究によると、文化十年(一八一三年)という。近藤重蔵が旭川に宿泊した六年後である。その間に、チユクベツブトの番屋が何らかの理由で消滅し、ムリチヤロ対岸の石狩川左岸に番屋が設置されたものと思われる。北大所蔵図も同一地点に番屋の印が記載されている。

近藤重蔵の五十年後の安政四年(一八五七年)に、上川を調査した松浦武四郎は、間宮林蔵の上川滞在中の案内人まで野帳(のちょう)(フィールドノート)の『巳第二番』に記録している。しかしながら、近藤重蔵や間宮林蔵が記録した番屋については一切言及していないのは、全くの謎である。

次回は、松浦武四郎の地図と明治時代の地図等で、右岸のメムの検証をしたい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します